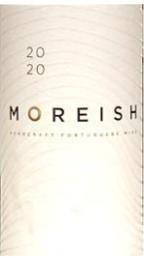


醸造家ルイシュ・ロペシュはポルトガルで醸造学を修めたのち、ブルゴーニュ、ニュージーランド、ドイツで醸造家として働き、2006年にポルトガルへ帰国しました。帰国後はダン地方のキンタ・ダ・ペラーダで醸造責任者として働き（2006～2017）、アントニオ・マテイラ氏の元でも醸造コンサルタントとして勤務している。

ルイシュは伝統と先進技術の共存するブルゴーニュや、世界のワイン市場でクオリティーワインとして認知の広がるニューワールドでも醸造経験を積んだ。クラシック/モダン/ナチュラルなどワインのスタイルによらず、こよなくワインを愛するルイシュだが、フランスにいた頃の忘れられない経験の一つはピエール・オヴェルノワとのディスカッションだった。醸造中の亜硫酸の是非について、とことんまで質問を投げかけたという。

2022年現在、ダン地方のアントニオ・マテイラ氏の元で醸造コンサルタントとして働きつつ、買いブドウで、自身のワイン造りをしている。友人のワイナリーを間借りして、コンサルタント業の合間を縫ってのワイン造りなので、初VTから2021年VTまでの毎年の生産量は1000本以下。そんな彼の2013年のワインを、2019年にパリのポルトガルワインバーでラシーヌの開発チームが飲み、彼にメッセージを送ったことから、ルイシュとのやり取りが始まったのだが、彼にとってはあまりにも思いがけず、嬉しいことだったそうで、彼自身の生産が本格的に始まるまでは、ほとんどの生産ワインを日本に向けて出す、とまで言ってくれた。

人柄もさることながら、醸造センスとワインへの見識の深さから、他の生産者からも「彼はナショナルスターだ」と高く評価されていて、これからのポルトガルワインシーンにおいて重要人物になることは、間違いない。

	○Moreish Branco モーリッシュ・ブランコ			備考	モーリッシュとは英語で More+ish、「つぎつぎと杯が進む、もっとほしくなる」といった意味。本人は自分のワインをglou glou（仏語で“ごくごく”と喉の鳴る音）なワインだというが、上品な果実味と、白い花、アーモンドの余韻が長く続く、品位を感じるワイン。
	畑	品種：マリア・ゴメシュ、ピカル 植樹：1980年代 位置：東向き、西向き斜面 土壌：ライムストーン	醸造		
	○Moreish Branco Maceração モーリッシュ・ブランコ・マセラサオン			備考	モーリッシュと同じ畑のマリア・ゴメシュを使用。ブドウはルイシュの妻が足で破碎している。清澄なし。うっすらと澱が舞っている。
	畑	品種：マリア・ゴメシュ 植樹：1980年代 位置：東向き、西向き斜面 土壌：ライムストーン	醸造		